

紹介

●支那古器圖攷 兵器篇

原田 淑人著
駒井 和愛

本書の目的とするところは考古學的に古代遺物の諸形式を體系化しようとするのではなく、むしろ文獻上の名稱を遺物に比定せんとする云はゞ名物考的なものであることは既に本書の序文中に明言されたとおりである。従つて利器を取扱ひ乍らも考古學上の重要な三つの時代概念——石器時代・青銅時代・鐵器時代——の指標としては論ぜられてゐない。形式上の論もところどころに見えるが、それは副次的なもので、主とするところは今日遺物として見られる兵器のうちの或るものを拾ひ舉げて、それを文獻と比定するにある。比定するところは多く正鵠を得てゐる様であるが、併しこれで著者が考へられてゐる様な文獻學者啓蒙の大目的が達せられるであらうか。話を具體的にする爲めに一つの例を以て云ふ。圖版第四第五・第六では同じ形式の利器が斧或は戚或は鉞と呼ばれてゐて、その三つの名稱の使ひ別が果して何に由來するかは説明されてゐない。若しかう云ふ使ひ別が必要であるならばそれを説明して人々を納得さすことこそ本書の目的ではなかつたらうか。本文を見れば戚は戣なり、戣は大斧なりとの『說文』の解釋が採用されてゐるらしい。考古學的に云へば敢へて名稱を選ばないが、若し古文獻の

名稱を考古學的な一つの形式に及ぼすとすればこの一群は、戣と呼ばれるべきだと思ふ。文獻の上で種々の名稱があつたとすれば、それ等はそれ／＼に理由もあつたことであらう。併し乍ら考古學上の形式的な理由と一致するものばかりでないことは勿論である。むしろ考古學で云ふ形式とは別な理由で名稱がつけられたり、廢せられたりする方が普通であつたと思はれる。斧と戚と戣の名稱が形の上の相違でない限り、その區別を遺物に求めることは無意味である。たとへ求め得たとしてもそれには大きな但し書を必要とするであらう。その但し書きの説明こそ文獻以外を往々にして見落さうとす文獻學者の啓蒙になるのではあるまいか。之を逆に行けば古文獻上の名稱で考古學的な形式が混亂されることになる。これは過去長い間に亘つて常に名物論者を苦しめてゐた恐るべき陥穽であつたのである。

もう少し斧に就いて私の考へを述べらば、袋穂の斧頭と稱してゐる一類に斧斨の名を當てるのは正しい。そして形式的に云へば、その中には双を縱(即ち柄と又とが平行する)につけるものと、横(柄と又とが直角になる)につけるものがあつたらしいが、之に相應する名稱を私は未だ知らない。また双の廣い縱につける一群は明らかに古文獻の戣であり、戚であり、また斧でもある。併し戣と戚と斧との相違をまだ遺物の上に當て嵌めることは出来ない。兎に角、文獻學者啓蒙の爲めには名稱論と形式論との區別をはつきりさして、詳しい説明を興へて欲しいと思ふ。これは名物考の根本に要求されるものであらう。

文・戟・矛・玉具劍の名は正しい。唯圖版一、二、四の朝鮮樂浪古墳出土の銅矛の説明に「矛刃の莖部に接するところに一種の山形文の裝飾が施され云云」(一一頁)とあるが、あれは矛の鞘袋にあつた口金具らしい。詳しくは朝鮮總督府の大正十一年度報告第二冊にある。また甲冑の方は古い資料がなくて困難であるが六朝の武人飾を資料とされ乍ら、ラウファー氏の甲冑の研究「Chinese Clay Figures」第十五圖第十六圖にある札甲をつけた漢の武備を引用されなかつたのはどうかと思ふ。併しこの二つはこれだけの特殊な問題である。

要するに何事でも始めから完璧を期することは無理である。何等纏つたもの、ない支那考古學界に對しては重要な礎石である。礎石は踏み臺にされる爲めに必要なものであり、尊いのである。善かれ悪しかれ將來の兵器論はこの礎石から出發するだらう。私が非禮をも顧みず勝手なことを云つたのも本書を出發點としてのことである。時代の經つと共に本書の眞の價值は自ら決せられるであらう。(東方文化學院東京研究所 昭和七年刊、菊二倍大、三七頁及四四頁圖版五二)〔水野〕

●魏晉南北朝通史

待望の書、東北帝國大學教授岡崎文夫氏著魏晉南北朝通史出づ。全書を内外二篇に分ち、内編は東漢宦者の禍より筆を起し、北周、南朝陳の滅亡に至る治亂興亡の跡を叙し、外編は魏晉南北朝の文明を概観してゐる。

從來東洋史に關する著述は斷片的な論文を集成したものが多く、一時代を通論したものは僅かに稻葉君山博士の清朝全史、矢野仁一博士の近代支那史等二三あるに止まる。近頃國史のやり方を模して講座風に數人で各時代を分擔する叢書が出たが、形式上の束縛があるので、書く人も十分に筆が揮へぬであらうが、讀者の方でも不満である。最も得意とする一時代の通史を、何等の掣肘なく、心のゆくまゝに論述したのは、古代の部に於ては、此著を以て最初の試みとする。

内編は主として、著者の言を借れば權力の移動する所を究む。元來この時代は所謂暗黒時代であり、五胡十六國の興亡の大勢に就て、一通りの概念を得るさへ容易でない。著者はよく史料を咀嚼消化して、自己のものとして説明してゐる。決してありふれた通鑑輯覽の抄譯でない。恐らくはあまり參考書に頼ることなく胸中に蓄へた知識を吐き出して一氣呵成に出来たのではないかと思はれる。従つて複雑な事象を尤も印象強く叙述してゐる特長があるが、又其爲に折々人名などの混同が生じてゐる。一九七頁の謝尙は謝玄なる可く、次頁の苻登は苻丕であらう。尤も之は前後を精讀すれば自然に分るが枋頭の戰を記してこの時の花形役者慕容垂の名を逸してゐる等は如何かと思ふ。蓋し博學より生じたる粗漏であらう。

外編は、之も著者の言を借れば、専ら人文の化成する迹を記す。著者の云ふ人文とか、文明とかいふ意味は恐らく人間其物、社會其物のありのまゝの姿を云ふのであらう。近頃文化といふ